針立の道庵　黄八丈の着付、茶紬の被布、黒襟に黒帯　岩永左衛門

親　孫右衛門　鼠無地の着付、胴着黒襟黒帯、小紋の羽織、茶色の肩衣　榛澤六郎

捕手小頭　黒の毛繻子の着付、胴着白麻の襟縦縞、博多の袴　阿古屋

黒繻子雉子模様の縫の袴　黒貂の着付、胴着樺襟、赤地八枚の袴

壇浦兜軍記

阿古屋琴責の段

秩父庄司重忠　白繻子熨斗目着付、胴着白麻の襟　水奴

萠黄草柳熨斗目の着付、胴着白麻の襟、草柳緞子の袴

赤胴着の着付、下衣裳傾城襟、黒繻子扇模様の打掛、黒繻子の廻帯

黒木綿奴衣裳、黒襟に胴着、茶のデンチ（袖無）絞々帯

（文責吉永）

文樂今昔

木谷蓬吟

◇…私は小學生時代からよく文樂の樂屋へ遊びに行つたもので、名人玉造から金時のまさかりを貰つて嬉しがつた記憶がいまだに消えない、その後、日露戰爭に召されるまで、殆ど興行毎に文樂へ通つたものだ。

◇…その頃の太夫には、一人々々異なつた特色を持つた人が、少くとも五六人はあつた。藝の上手下手よりも、理窟に合ふ合はぬよりも、聽き終つてから、家へ歸つてからも、何か知らぬが印象に殘るものがあつた。樂しい思ひ出と云つたものがあつた。文樂の戻りを臘月夜かななど駄句つたものである。

◇…三味線にも名人が多かつたらしいが、未熟な耳には慾じて穏かに聞えてゐた。たゞ團平の恐らしい撥の唸りに肝を冷したことだけは覺えてゐる。人形遣ひにしても、ココと云ふところは非常に力を傾けて遣つたが、あとは餘り目立つた演技は見せなかつた。太夫の語りに應じて人形は人形らしく、これを本物の人間に近く如實に見せようなどとは思つてゐなかつたらしい。

◇…要するに今の文樂人は、太夫も三味線も人形も、全面的に尖つた神經を働き過してゐるのではないか、隅々へはよく氣がつくがそれだけに餘裕がない、ちやうど餘白のないベタ一面の繪を見るやうな感じである。餘白と云ふものゝ味を忘れてゐるのではないか、餘りに空想に缺けてゐると思ふしかし是れは近頃の文樂をたまにしか觀かない私の錯覺であるかも知れない。

（五月七日東京新聞）